

奈良・人と自然の会



森林保護を考える II

川井 秀夫

「文化遺産を守れない国は、環境問題を語る資格はない」これは外国のジャーナリストが言った言葉だが、先日 平城宮跡 大極殿正殿復原の工房を見学、昨年は唐招提寺の平成大修理の現場を、また斑鳩の里で、名工 西岡 常一氏の遺された工房を見聞し、日本の木の文化、匠の世界に心酔し、驚きと感銘を受けたものである。

しかし、散在する製材の巨木を見ていると、この木はどこから来たのか素朴な疑問が湧いてくる。関係者によればヒノキは台湾、ケヤキは紀伊山地からと言う。

話は変わるが、能面の素材は木曽産のヒノキが最も良質で、枯渇しつつあるとも聞く。また、碁盤のカヤ、野球のバットのアオダモも輸入材に頼る現実がある。

日本は既に熱帯林を破壊する先鋒の烙印を押され、最近では熱帯林の保護規制により寒帯林にその手を伸ばしている。森林破壊が何をもたらすか、今や自明の理と識者ならずとも心が痛むが、心なき為政者に、利益優先の経済人に、良識を強く促したい。

この様に書くと、日本が大罪人の様に聞こえるが、世界に目を向けると熱帯林の喪失の最大要因は途上国の貧困と人口爆発、就中、食糧危機にある。焼き畑農業による伐採・牧畜・農場の建設、観光開発等 今や日本の総面積の80%が、毎年森林が失われつつあると言う。

世界の現象を見ても、スエズ運河の土砂の堆積、黄河の断流、バングラデシュの洪水と旱魃、これらは流域の緑の喪失がもたらすものと言われている。

最近余り報道されなくなったが、硫黄酸化物・窒素酸化物が硫酸と硝酸に化けて大気を汚染、酸性雨となって山林を死滅させる 等々・・・。

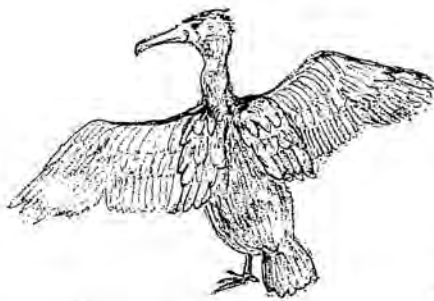
緑の破壊⇒土壌の流失⇒災害多発⇒農業の低迷⇒飢餓。この悪循環を断ち切る国際的な施策の中に、先進国 日本の役割は、極めて重要な意味を含んでいる。

話を日本に戻そう。文化と文明の相克はいつの時代にもあるが、伝統的な基層文化は自然の恵みをつつましく享受して守られるべきだと思う。伊勢神宮の20年ごとに行われる式年遷宮を無駄とみる人もいるが、神が宿る木を、腐る前に命を受け継いでゆく、命を常に新しくしていく、これが遷宮の本質である。森の養った道德と技術、木は日本の命の象徴として存在する。

因みに伊勢神宮は神路山・島路山の御用林を持ち、造替の古材は中小の寺社にリユースされていく。

また、弥生時代から続く稲作農業は、森を伐り過ぎてはいけない事を知っている。なぜなら最も大事なものは雨で水は森が蓄える。少しずつ川に流し絶えることがない。農業は森も伐るがその森は必ず残していく。

梅原 猛は言う。砂漠で起こった思想は地球を砂漠化する。森の思想が地球を豊かにする。そして生命を奪わない。そういう思想に人類はもどらなければいけない。日本は勿論戻らなければならないと。



カワウ

長野 晃

近くにいる大型の黒いトリといえばカラスとカワウです。地上や樹上にいる時は問題ありませんが飛翔時の区別は最初のうちは少し難しいかもしれません。ずんぐりしていてゆっくりした羽ばたきであればカラス、首が長く全体にほっそりで羽ばたきが早ければカワウです。複数羽飛んでいる時はばらばらであればカラス、隊列を組んでいればカワウです。

カラスは真っ黒ですが、カワウは全体に黒色で背中の中部分は茶褐色、嘴は薄い黒色、嘴基部は黄色、頬は白色で繁殖羽になると顔と脚の付け根部分が白くなります。もっとも光線の具合や個体差で背中が真っ黒や黒緑色に見えることもあり、また、若鳥は茶色っぽい等々具体的に書くとすると結構複雑です。観察する際のもうひとつの目のつけどころは「目」です。虹彩が美しい緑色ですが、緑の虹彩を持つトリは他に思い当たりません。

この鳥が泳いでいるのを見ると身体が殆んど沈んでいて背中の中部分と首から上だけしか見えず、近くにいる多くのカモやカイツブリが殆んど腹部しか水に浸かっていないのと対照です。また、水から上がると翼を半開きにして陽や風に当てて一生懸命乾かしているのもよく見かけます。これは、他の水鳥に比べカワウの羽には脂肪分が少ないからだそうです。少し難しくいうと、尾脂線が未発達で脂肪の分泌が少ないということです。ウは潜水が得意で水掻きが3枚（カモは2枚）あります。尾翼で舵をとりますが、翼は畳んだままです（アイサ類などは翼で水を掻く）。水中で魚を食べることはできず、必ず水面に出てから飲み込みます（カイツブリは小魚なら水中で飲み込むことができるようです）。

ところで、ウという名は「魚（うお）」のウ、魚を飲み込む時の音、「浮く」のウなど諸説があります。漢字の鵜は中国ではペリカンのことで、植物名でもたくさんの例があるように、間違っただてられたものです。ウは中国では「魚鷹」で、別名もありますがここでは表記出来ないで省略します。「魚鷹」というとミサゴを連想しますが、その通りで中国ではミサゴも「魚鷹」だそうです。何れにせよウはペリカン目のトリですから、「鵜」の字が当てられたことは、当たらずといえども遠からずというところでしょう。

鵜と言えば鵜飼ですが、鵜飼に使うウはウミウでしょうか、カワウでしょうか。正解はウミウです。宇治川の鵜飼に若い女性の鵜匠がいますが、彼女がまだ修行中であった3年ほど前、話題に悪乗りして生まれて初めて鵜飼なるものを見物に行きました。いざ出陣の直前、パドック？に繋がれたウたちに彼女が魚を与えるところまで見せてもらいましたが、その時にパッチリ確認しました。嘴の付け根の皮膚の露出した黄色い部分が白い部分にキュット入り込んでいました。カワウではこれが入り込んでおらず、両者のもっとも顕著な区別点です。「鵜飼には昔はカワウを使っていた」という記述もある一方、両種の識別は難しく「1932年まではウミウをカワウ、カワウをウミウと呼んでいた」という記述（大橋弘一著「鳥の名前」）もありますので、ややこしいことですが、現在はウミウを使っていることだけは確かなようです。今年の夏は久しぶりに宇治川へ行き美人鵜匠の成長振りを見届けたいと思っています。

「おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな」 芭蕉

5 月度例会報告「高取城跡」

【実施日】 5 月 28 日（土）晴天

【コース】 近鉄壱阪山駅（バス）— 壱坂寺・・・五百羅漢・・・八幡宮・・・高取城跡 583.9m（昼食・散策）・・・国見台・・・猿石・・・七曲・・・砂防公園（反省会）・・・植村邸長屋門・・・夢創館・・・壱阪山駅（所要約 3 時間、7 キロ）

【参加者】 市村、織、川井、勝田、小山、砂山、豊田、西村、野田、林、福谷、山田、吉村、弓場、豊島（担当）

【参加者の声】 変化に富んだいいコースだった。木苺が一杯あって楽しかった。緑の中でいい気持ちになれた。参加して良かった。岩山に点在している羅漢がすばらしかった。山城の偉容に圧倒された。日本一を実感した。高取山は来るたびに新しい発見がある。

【担当からひとこと】 コースを歩いている間ずっと小鳥の声が続いていました。木立の中を歩くのはとても気持ちのいいものです。桜の頃、もみじの頃にぜひ一度訪れてください。



6 月度例会「シャクナゲの稲村ヶ岳」参加日誌

— 6 月 12 日（日）・13 日（月）—

小森 清道

気象予報官の舌打ちが聞こえてきそうな「入梅宣言」直後の好天気の中、洞川温泉に 1 泊 2 日の行程で稲村ヶ岳(1,726m)を登頂する行事に参加する。3 名の新規会員を含め男性 9 名、女性 13 名の総勢 22 名。

下市口駅から 1 時間ほどバスに揺られて洞川温泉郷で一番の老舗を誇る宿泊旅館にリュックを預け、早速初日の行動に入る。先ずは竜泉寺で安全祈願と腹拵え。境内のオオヤマレンゲの蕾に関心が集まる。修験者のホラガイを借りて夫々が挑戦。先ず会長、次いで副会長いずれも音なし。次々と手渡るが全て「スー」。唯一人、I 氏が初音を高らかに響かせた。さればと滴を持して自分もトライしたが結局音(ネ)を上げただけ。

洞川の名勝「面不動鍾乳洞」や「かりがね吊橋」を訪ねた後、モミ・ウラジロモミ・トチ等針・広混交林の自然研究道を経て展望台に至れば眼下に温泉郷が一望され、正面の迫った山並みに周囲のスギ・ヒノキの植林とは一際異なった色彩の植生郡も散見される。「クリです」、寺田リーダーが飢饉に備えた村人の知恵を教えてくれる。水が冷たい故に稲作が適さない厳しい環境でのまさかに備える「救荒植物」だったのだ。

洞川の清流の辺に“役の行者”が修行したと言われる“こうもりの岩屋”と“とうろうの岩屋”があり、とりわけ後者にはド肝を抜かれた。

小規模の鍾乳洞で天井はあくまで低く、足許はアイスパーン状のうへ至る所にクレバスがありしかも周囲は真っ暗闇、冷氣すら漂う。進むには貸出し懐中電灯の一条の明かりを頼りにお相撲さんの仕切りの姿勢で一步一步ドスコイ・ドスコイ。足許に気を取られて腰が浮くと「頭が高い!」とゲンコツでゴツン。と言って上にばかり気を遣っていると足許を掬われる。唯ひたすら平身低頭、這いつくぼうしかない。なんだかこれまでの自分の人生を再現しているみたいで何とも早や・・・。

岩屋の辺の清流にカワガラスが出現、キセキレイ共々短い修行の後の心を和ませてくれた。さすが“大峯山系”は自然豊かで奥が深い。“エコミュージアム”で見たビデオがその厳しくも優しい魅力を物語っていた。

宿では天川村観光課の樋口さんと洞川エコミュージアムの大西センター長が出向いて来られ、我々に大峯山と役行者所縁の歴史、大峯山の玄関・洞川の戦後の大火と復興の歴史、温泉湧出後の観光化の歩み、更には女人禁制に係わる時代の変遷や五社寺・八講の対応、果ては“吉野”との角逐云々まで興味津々の話題で講話を頂戴した。

温泉風呂結構でした。夕餉のお膳これもまた結構でした。

酔い覚ましに下駄履きで表通りを散策すれば、縁側を大きく開けた所謂“行者宿”が軒を連ね、看板に“陀羅尼助”を掲げる店がそこかしこ、下駄の音だけが反響する静かな山あいの佇まいだった。

「5時起床、6時朝食そして6時半出発、時間厳守!」弓場リーダーの声が朝に弱い我が身に突き刺さる。早めにお開きとなった酒宴から男性部屋に戻ってみれば大部屋に膏藥を張り詰めたように9枚の布団が一杯に敷かれている。ああ懐かしの修学旅行。夜も更けるに連れ9人、否8人の男性が奏でるハーモニーの物凄さ。上手では断崖に打ち寄せては玉と散る怒涛の響き、下手では松林を吹きぬける風の轟々たる響き、大自然の真っ只中に身を横たえるうちに白々と眠れぬ夜は明けてきた。

明けて2日目、愈々“稲村ヶ岳”めざして時刻どうり登山口に入る。スギの植林を切り開いた登山道は緩やかな勾配と落枝葉に覆われて足に優しい。

この“稲村ヶ岳”は元は“山上ヶ岳”(大峯山:1,719m)と同様、女人禁制の山であったが開放を求める時代の要請を一部取り入れ、女性が楽しめる様に林道を整備したもの・・・と言う昨夜の講話を思い出す。ぐんぐん登り法力峠(1,217m)で一息入れる。

この辺りで周囲の植生はがらりと変わり、スギの人工植林からブナ・ミズナラ・カエデなどの広葉樹やウラジロモミ・ツガ・トウヒなどの針葉樹が混在する所謂“冷・温帯植物相”が巾を利かせる。次の目標地である山上辻の稲村小屋までの荒い道筋の脇にはイワカガミの可憐な花や盛りの過ぎた名残のシャクナゲ、それにサラサドウダンなどが目を楽しませてくれる。谷間からはシカの鳴き声だろうか?。開けた林でアカゲラの甲高い警戒の囀りが長々と続く。そして辺りに木霊するドラミング。

期待の稲村小屋は未だ本格的なシーズン前とあって閉鎖のまま。水施設が使えないとあって急遽“男人結界”が設けられた。一同身軽になって愈々山頂を目指す。

山頂まであと10分程度の道程で何たる事、登山道が大きく崩落している。山馴れした者なら何とか突破できようが22名全員の無事往来は期し難い。リーダーは状況判断の上“勇気ある撤退”を選択。安全を旨とする当会の面目躍如である。

小屋の位置に戻り宿のニギリで昼食を取る。汗ばんだ肌に風がやや冷たい。「19度です」寺田リーダーが告げる。開けた広場の周囲を「かな～」とヒグラシの鳴き声に似た昆虫の大合唱が取り巻く。季節から見てヒグラシは早過ぎるのでは?ハルゼミか?それともエゾゼミか? 帰路は先ずレンゲ辻へ下り“女人結界門”の境界線上で女性達が集団記念写真を撮る。ここから先が急な下りの連続、しかもゴロゴロと大小の石が散在するガラ場で気が抜けない。ひたすら足許を確かめながら一気に下山する。「行きは良い良い帰りは怖い」を地で行く。全員無事下山できたのは何よりだった。

登山口から入ったのが6:45、同じ場所に戻ったのが15:15。計8時間半の登山行であった。腰の歩数計が2万歩を刻んでいた。名水100選の“ごろごろ水”で喉を潤し更に宿でひとつ風呂浴びたあと天下の麦水を一杯喉に流し込む。弓場幹事の行き届いた配慮で帰路のバスは貸切。心地よい疲れと麦水の薬理効果で夢心地のうちに大峰山系の大自然に別れを告げた。

幹事並びにリーダーの皆さん、本当に有難う御座いました。



第3回近畿自然歩道・まほろばの路に参加して

—大淀フルーツの里をたずねる—

篠原章二

今春、自然大学11期生として無事卒業し、地元の「奈良ネイチャー」に入会させていただきました。体力的なこともあって、大上段にかぶつての活動は何も出来ませんが、自然を愛する心を礎に、心身の健康を維持しつつ自然保護に役立つ何かができたらいいなと思ひながら、とりあえず、気楽に楽しめそうな「まほろばの路」走破を1年間の目標に置きました。

今回は第3回目のコースで、第1回目の「吉野・宮滝から吉野山」に続いての参加となりました。(2回目のコースは都合で参加できず残念に思っています)

この日はやや暑い1日となりましたが、下市口から西阿田町までの約8kmのコースを汗を拭き拭き歩きました。(下市口—大阿太高原—大野新田—阿田明神社—西阿田)

嬉しいもので、やはり自然大学です。道中は、先輩の皆さんに色々と樹木や植物の名前を教えていただき、また、高原の森で美しく囀る野鳥の名前を教えていただきながらの遊歩でした。特に嬉しかったのは、幼少の頃、田舎で食べた桑の実や木いちごを自然のまま味わえたことです。味はともかく幼少時代の思い出と重なってとても感動いたしました。

大阿田高原は20世紀梨を代表とするフルーツの産地でした。

お昼はそのフルーツの里「水盛園」で休憩をさせていただき、経営者の田仲やすたけさんから梨作りの苦労談をお聞きした後、梨の棚木の下で袋掛けされた梨を見ながらのお昼でした。田仲さんのお話で、いかに梨作りが大変かがよくわかりました。1年中全ての仕事の手作業であり、黒斑病(黒星病)や自然災害と闘いながら、薬に頼らない美味しい梨を作ることがいかに難しいかを教えていただきました。

時期が時期ならこの苦労の結実たる美味しい20世紀をご馳走になれたのに・・・といじましい心がちらちらとうごめいていましたが・・・。

収穫の季節になると、梨狩りなどで賑わうそうです。やはり、ここでも例に漏れず驚かされたことは、子供たちが梨の皮をナイフでむけないと言うことです。ナイフを使えない、使わせない教育、そういう風土に染まった今の日本の現状に改めて大きな矛盾と行く末の恐ろしさを感じさせられました。

食事の後は観察をしながらの下りのコース。路沿いには、ウルシ科のウルシ、ヌルデ、ハゼが沢山ありました。見分け方を教えていただいたのは嬉しかったのですが、ウルシと考へただけで幼少の頃いつも、かぶれて悩まされていたことを思い出し、この場から早く脱出したい気持ちにかられていました。

帰路、阿田明神社に参拝しました。誰もいない、建物の傷みがひどい淋しい神社でしたがこの境内で「天台烏桕」という珍しい樹木を観ることができました。

この樹木は珍しい薬木とのことで、いつまでも元気に過ごせるよう阿田明神社に手を合わせ、1枚の葉っぱを記念に持ち帰りました。

日 時：6月18日(土) 晴れ

———<担当者メモ>———

コース：下市口(10:02)・・・大阿太高原水盛園(大阿太の梨のお話、昼食)・・・花岡大学記念

碑・・・大野新田・・・阿田明神社(反省会)・・・西阿田(バス)一下市口(15:15)

参加者：17名(内下見7名) 勝田、勝田、川井、小山、砂山、篠原、志水、高井、寺田、林、
福谷、藤田、山田、吉村、弓場、豊島 担当者：川井 豊島

20世紀梨の生産で有名な大阿太の台地を縦断するコース。ネジキやそよご、桑、コナラなど木の種類も多く、目の前に金剛山や葛城山の眺望が開け、高原をわたる風はさわやかでした。梨のシーズンには摘み取り体験や現地直売所の露店が並びます。

植物の知識いろいろ

寺田正博

ヒノキ・檜・檜木 (ヒノキ科) の語源

樹皮(ひわだ)は赤褐色で、屋根材に用い、材は優良な建築材で船舶材・器具材にも利用される。「檜 比乃木」(新撰字鏡)。万葉集では単に檜(ひ)と書かれている。ヒノキに漢字「檜」を使うのは当たっていないと牧野富太郎はいつている。

(檜はイブキジャクシン)。(牧野新日本植物図鑑)

[語源] ①「火の木」の意で、古来この木をこすつて火を起こしたことから。②ヒメハノキ(姫葉之木)の義。③「日の木」もしくは「霊の木」などの諸説があるが、第一説が圧倒的に支持されている。しかし、実際には簡単には点火したりしない。ヒノキに似た木でいえば、杉の方が火はつきやすく、ヒノキはこすつて火を起こすことと結びつきそうにない。方言で和語の「ひ」は太陽を表す最も古い語形で、最高のものを表す。契沖の説にヒンをてヒノキ瑞宮用材の尊木観から、深津正は日(ひ)もしくは、霊(ひ)をもって檜(ひ)の語源とされている。 語源辞典植物編 吉田金彦 他

アオバズク

小田 久美子

青葉が茂りはじめる頃、南から渡って来るフクロウの一つに「アオバズク」がいます。明る〜い新緑を背景に見上げると高枝で休息をしているアオバズクたちは、侵入者が来ても逃げる訳でもなく黒い瞳の周りが金色で、猫がビックリした様な顔をして私たちを見下ろしています。この辺りでは京都御苑が有名で、巣立ちの頃にはカメラマンで賑わいます。数年前、東大阪の神社へ毎年通ったことがあります。古老の話では、昔から楠の大木で代々子育てが目撃されていたようです。H13年は巣立ち直前の7/17母親が死んでいるのが見つかり大変心配しましたが、お父さん1羽で奮闘努力の甲斐あって22日無事子供3羽が枝に止まって居るところを見て皆んなを安心させました。餌の確保が大変だったのでしょう末っ子がかかなり小さかったのが印象的でした。今年も4/22にオスが到着、お嫁さんも来たようです。夫婦揃って恙無く今年も子育てを成功させて欲しいと願います。

もっぱら夜活動するフクロウ類は、古くから世界的に不吉な鳥とされてきましたが、一方人間っぽい訳知り顔の風貌から知恵者としても、(日本では)「福郎」という響きからもてはやされ、今や焼き物、置物、アクセサリ等では不動の人気キャラクターになりました。魔法使いには大事なアイテム、ハリーポッターでも活躍しています。

お近くの神社に大木のある鎮守の森が残っているようでしたら、是非ウォッチングしてみてください。眠そうな目が猫の目になるのが見られるか、悠然と考えごとをしている最中の賢者に出会えるか、巣立ち後のファミリーに出会えるか楽しみです。





地域情報



★5/28午前8時40分自宅西側の貝吹山方向からカッコウの鳴き声が聞こえました。

こんなに近くではつきりと何回も鳴くなんて関西に来て初めてです。〈齋藤〉

★6/13大和川でオオヨシキリが口を大きく開けて鳴いていました。口の中は

真っ赤でした。

〈勝田〉

★04・4月～05・5月の間に竜田川・三室山近辺で51種類の鳥を見ました。

〈勝田〉



行事案内



【奈良忍辱山森林整備作業】

〈場 所〉 奈良忍辱山国有林（集合場所より東海自然歩道を奈良方面へ約10分
淀川、木津川、白砂川の源流域）

〈集合場所〉 忍辱山円成寺駐車場（バス停 円成寺口と忍辱山円成寺の中間）

〈日 時〉	7月 6日（水）	10時30分	第29回
	7月17日（日）	9時30分	第30回
	8月 7日（日）	9時30分	第31回
	8月24日（水）	10時30分	第32回

〈終了予定〉 午後3時頃

【天 候】 午前6時 奈良県北西部に警報が発表されている場合は中止いたします

〈交 通〉 奈良交通バス 平日〔月ヶ瀬温泉行き〕 土、日〔柳生行き〕

JR奈良駅③番乗り場	近鉄奈良駅④番乗り場	忍辱山円成寺
------------	------------	--------

平日 8:15 26

8:18 29

8:51 9.02

✓ 平日 9:30

9:33

10:06

臨時バス お問い合わせ

奈良交通 ☎0742 (20) 3100

〈持ち物〉 ヘルメット（防災用）、手袋、スパッツ、鋸、防護眼鏡、弁当、飲み物
長袖着用。

ヘルメット、防護眼鏡、鋸等の用具は当会にて多少は用意しております

《未経験者には基本より指導いたしますのでお気軽に。森林を楽しみましょう。》

〈連絡先〉 弓場厚次

阿部和生

寺田正博

実施報告・参加者

6月4日（土） 晴れ 爽やか 5名

中畑、明石、下村、阿部、寺田。

爽やかな気候で作業は捗る。

6月16日（木） 雨天のため中止

7 月度例会 生駒路・樹林観察 III

古寺を訪ね、成熟した樹林を抜けて、生駒山の尾根歩きを楽しみます。

暑い時期ですが、涼感を味わって下さい。

- 1 日 時 7月14日(木) 小雨決行
- 2 集 合 近鉄生駒線 東山駅改札口 AM10:00
- 3 交 通 ①近鉄奈良線生駒駅乗り換え王寺行 20分
②JR 関西線王寺駅乗り換え生駒駅行 20分
- 4 行 程 東山駅バス⇒千光寺⇒鳴子峠⇒暗峠⇒解散 3:00
帰路 ①いこま棚田経由 南生駒駅
②枚岡公園経由 枚岡駅
- 5 準 備 弁当持参 飲み物 観察用具
- * コースは平坦部ですが暑さ対策要
- 連絡先 古川 裕司

近畿自然歩道・「まほろばの路」

第4回 榮山寺と花の古寺をたずねるみち

吉野川右岸にのぞむ天平の香り高い榮山寺、天誅組の本陣となった桜井寺を経て、JR 五條駅にいたるコース。

西阿田町から吉野川右岸に至ると芝崎の奇岩が覗かれる。水辺の広場周辺の川は奈良県で行なわれた国体のカヌーのスラロームコースで、関西のカヌーイストの人気スポットにもなっている。水辺を歩き「榮山寺」につく。

「榮山寺」は719(養老3)年、藤原不比等の嫡男武智麻呂によって創建され、広大な寺領をもっていた。本尊は木造薬師如来坐像(国重文)で、日光・月光菩薩立像を従えており典型的な室町時代の作風とされている。本堂横には八角円堂(国宝)があり、緑に囲まれ一際美しい。梵鐘(国宝)、他国重文の仏像、塔がありすばらしい古刹です。

- 日 時 7月20日(水)
- 集 合 10時40分 【バスの発車時刻に余裕がありません。時間厳守!】
- 場 所 近鉄吉野線「下市口」
- 行 程 バス「下市口」～「西阿田」約15分
西阿田～水辺の広場～榮山寺～金剛寺～桜井寺～JR 五條駅
- | | | | | |
|-----|--------|-------|-------|-------|
| 電 車 | 近鉄 阿倍野 | 橿原神宮前 | 下市口 | バス |
| | 9:20 | 10:01 | 10:34 | 10:44 |
- 担 当 寺田正博

協力活動「いこま棚田クラブ」7月, 8月活動日ご案内

活動日 : 7/3 [日], 7/11 (月), 7/17 (日), 7/25 (月) 7/31(日)

8/7(日), 8/8 (月), 8/21(日), 8/29 (月), (8月は変則になりますご注意ください)

自由参加です。棚田の風に吹かれて見ませんか!

集合場所: 近鉄生駒駅下車 南口側ケーブル駅西隣セブンイレブン前

集合時間: 9時 現地までタクシー他 分乗で移動

持 物 : 弁当(第三日曜日は炊き出しあり) 作業スタイル

事務局 : 大寺道代